シモーヌ・ド・ボーヴォワールと実存主義

杉藤雅子

1. 序論

アラン・ルノーは、サルトルが『倫理学ノート(1983)』を未完のまま放棄した外的説明の一つとして、ボーヴォワールによる『両義性のモラルのために(1947)』の刊行を挙げ、サルトルが言わんとしていたことをボーヴォワールが書いてしまったからではないかと推察している。しかし、ルノーは、『両義性のモラルのために』での企てはサルトルの『存在と無(1943)』から引き出された倫理学の企てに対応していると述べている。[1]

この表現によれば、あくまでもオリジナリティは『存在と無』にあることになるが、最近の研究では、『存在と無』のオリジナリティそのものが疑問視されている。ボーヴォワールの小説『招かれた女(1943)』と『存在と無』は同年に出版されているが、フルブルックは、日記や書簡を根拠に、『存在と無』が書き始められたときには、『招かれた女』の第二稿はほとんど完成していたと、また、両作品に共通する考えと議論のオリジナリティは『招かれた女』にあると記している。[2]

アラン・ルノーの発言は、「実存主義のモラル」においてはボーヴォワールがイニシアチヴを握っていたが、「意識の現象学」においてはサルトルが主導者であったということであろう。しかし、もしフルブルックの主張が正しいならば、「意識の現象学」のイニシアチヴもボーヴォワールが握っていたことになり、第二次世界大戦後のフランスで隆盛を極めた実存主義そのものの見直しが必要になってくるのではないだろうか。

一九四三年の初めにジャン・グルニエから「あなたは実存主義者ですか」と尋ねられたときのことを、ボーヴォワールは次のように回顧している。

キルケゴールは読んでいたし、ハイデガーに関しては、ずいぶん前から「実存の」哲学が話題になっていたが、ガブリエル・マルセルが最近言い出した「実存主義」という言葉の意味は知

らなかった（FA625）[3]。

「実存主義」という言葉の意味さえ知らなかったボーヴォワールがどのようにして実存主義者になっていったのだろうか。そして、ボーヴォワールの実存主義とはどのようなものであったのだろうか。それが本論の主題である。

2．『ピリウスとシネアス（1944）』

自伝『女ざかり（FA）』には、一九三〇年頃に関してなされた次のような記述がある。「私たちはキルケゴールの『誘惑者の日記』にとくに注目はしなかった（FA59）」。「『ビヒュール』誌にハイデガーの『形而上学とは何か』の翻訳が載ったが、私たちはまったく分からなかったので、興味をもたなかった（FA93）」。「キルケゴールの最初の翻訳がこのころ刊行されたが、読む気を起こさせるものは何もなく、私たちは無視した（FA157）」。

当時、サルトルは、さまざまなことを考えていて、それらを整合的にまとめるためには、助けが必要だと分かっていた（FA157）。彼にとって、助けとなると思われたのはドイツの現象学であった。「キルケゴールを無視した」という文章に、レイモン・アロンがアンズのカクテルを指差しながら、「もし君が現象学者なら、このカクテルについて語ることができる、そして、それは哲学なんだ！」と言ったエピソードが続いている。

その翌年の一九三三年に、サルトルはフッサール哲学の研究のためにベルリンのフランス学院に向かった。ベルリンでの研究の成果として、『想像力（1936）』、『自我（エゴ）の超越―現象学的一記述の素描（1937）』、『情緒論素描（1939）』、『想像力の問題―想像力の現象学的心理学（1940）』、『存在と無―現象学的存在論の試み（1943）』が刊行されたが、サルトルが関心をもって取り組んでいたのは「意識の現象学」であって、「実存主義」ではなかった。ボーヴォワールは自伝『女ざかり』にこれらの著書の要約と詳しいコメントを記している。

一九四三年の初めにグルニエから「あなたは実存主義者ですか」と尋ねられたとき、『存在と無』はまだ刊行されていなかったが、ボーヴォワールは原稿を何度も読み返し、付け加えるものは何もないと思っていた（FA626）。それを理由に、グルニエからの、彼が担当している選集に協力してくれるようにという申し出を固辞していたが、サルトルの勧めもあって引き受け、誕生したのが『ピリウスとシネアス』である[4]。

『ピリウスとシネアス』はボーヴォワールの最初の哲学的エッセイであり、一九四四年の一一月に出版されたこの著書は二部構成になっている。ボーヴォワールは『ピリウスとシネアス』の出版当時のことを次のように回顧している。

もし人間が《遠隔の存在》ならば、なぜそこまで超越するのだろうか、なぜもっと遠くへ超越しないのだろうか、人間の投企の限界はどのようにして決められるのだろうかと、第一部で私は自問した。私は、瞬間のモラルと永遠を問題としているモラルのすべてに異を唱えた。個別的な人間は誰も、神あるいは人類と呼ばれる無限なものと実際に関係することはできないのだ。私は、サルトルによって『存在と無』に持ち込まれた《状況》という考えの正しさと大切さを示した。私はすべての疎外（他有化）を非難し、他人を口実とみなすことを禁じた。…

第二部では、モラルに実証的な基礎を見つけることが主題だった。私は書き上げたばかりの小説の結論を、より詳細に、繰り返した。つまり、人間的価値のすべての根拠である自由は、人間の企てを正当化できるただ一つの目的であるということを。ところで、私は、サルトルの、事態がどのようなものであっても、われわれにはそれを乗り越えさせてくれる自由があるという学説に賛同していたが、もし自由がわれわれに天与のものならば、どのようにしてそれを目的と見なすことができるのだろうか。私は自由の二つの側面を区別した。つまり、自由は、好むと好まざるとにかかわらず、ある仕方あるいは別の仕方で、外から実存にやってくるすべてを自分のものとする実存の様態そのものであり、この内的運動は分割できないから、それぞれの人において全面的である。それに反して、人々に開かれている具体的な可能性は等しくなく、一部の人々が、人類全体が自由にできる具体的な可能性のほんのわずかな部分に到達する。彼らの努力は彼らを、もっとも恵まれた人々の出発点であるプラットフォームに近づけるだけだ。つまり、彼らの超越は内在の形で集団に紛れてしまうのだ。もっとも有利な状況において、投企は逆に真の乗り越えであり、新しい未来を築く。活動は、それが自分のためにまた他人のために特権的な地位を獲得すること、つまり自由を自由にすること（libérer）をめざすときには、善である。このように、私はサルトルの考えと、長い議論において、私が彼に反対して主張してきた傾向を両立させようと試みた。つまり、私は状況に序列を設けたのだ。主観的には、救済はとにかく可能であったが、それでもやはり無知よりも知を、病気よりも健康を、不足よりも繁栄を選ぶべきであった。私は、実存主義のモラルに具体的な内容をあたえるという自分の配慮をとがめはしないが、困ったことに、個人主義から抜け出したと信じていたときに、そこに相変わらずはまり込んでいた。個人は他人の承認によってしか人間的次元を受け取らないと、私は考えていた。にもかかわらず、私のエッセイでは、共実存はそれぞれの実存者が克服しなければならないような一種の偶発事として現れている（FA627-8）。

『ピリウスとシネアス』は英語圏では軽視され、出版から六〇年

後の二〇〇四年にようやく翻訳がなされた。その翻訳の解説において、デブラ・バーグオッフェンは、ボーヴォワールをまじめな（serious）哲学者であると見なすと、『ピリウスとシネアス』は無視できないと述べている。[5] 私も、『ピリウスとシネアス』には『第二の性』の主要な概念がすでに見られること、また、『存在と無』におけるサルトルの考え方との違いが現れていることから、軽視できない作品であると考えてきた。

『ピリウスとシネアス』では実存主義という言葉は使われていないが、その第一部、「カンディードの庭」では、人間は自発性、投企、超越であるから、アンガージュマンによって自分のものをつくり、他人との絆をつくり、事物や世界との関係をつくると説かれている。ここで、ボーヴォワールは行動の次元で自発性、投企、超越について語っているが、行動の次元に立つというのは彼女の一貫した姿勢である。

サルトルも『存在と無』において自発性、投企、超越を問題としているが、第一部から第三部までは、意識の次元における自発性、投企、超越であり、第四部になると行動の次元で論じられるようになる。[6]

『ピリウスとシネアス』の第二部では、他者論が、承認論として展開されている。[7] そこで、ボーヴォワールは次のように言っている。

他の人々によって承認されるためには、まず、私が他の人々を承認しなければならない。私たちの自由は、一つのアーチを形作る複数の石のように、互いに支え合っているのだ（PC120）。

サルトルも『実存主義はヒューマニズムである』において、「われわれの自由は他人の自由に依拠し、他人の自由はわれわれの自由に依拠している（EH83）」と述べているが、このような主張には、『存在と無』における主張との整合性が欠けている。したがって、『実存主義はヒューマニズムである』は、『ピリウスとシネアス』の影響下になされた講演であると思われる。[8]

3．『実存主義と民衆の知恵（1948）』

『レ・タン・モデルヌ』誌の第一号が一九四五年の一〇月に出た。これに前後して、サルトルの講演「実存主義はヒューマニズムである」が行われ、《実存主義攻勢》の火蓋が切られた。終戦のころ、カトリック、極右、コミュニスト、マルキストが「実存主義」を非難し始めた。サルトルもボーヴォワールも自分たちに貼られた「実存主義者」というレッテルを拒み続けていたが、無駄だった。「しまいに私たちは、みんなが私たちを呼ぶのに使っていたこの呼名を拝借して」、《実存主義攻勢》に転じた。[9]

《実存主義攻勢》にはメルロ＝ポンティも参加し、『レ・タン・モデルヌ』の一一月号に『実存主義論争』を発表した。ボーヴォワー

ルの『実存主義と民衆の知恵』は、一二月号に掲載された。[10] この辺の事情を『実存主義論争』とボーヴォワールの自伝『ある戦後』が詳しく伝えている。

『実存主義と民衆の知恵』における実存主義の弁護から、ボーヴォワールが実存主義を、どのように考えていたのかを探ってみよう。この評論は、「ほとんどの人は『実存主義』という哲学を知らないのに、多くのひとがそれを攻撃している」という文章から始まっている。攻撃している人たちは、「実存主義」は人間の偉大さを認めず、その悲惨さだけを描こうとする《ミゼラビリズム》であり、それは友情、博愛、どんな形の愛も否定し、個人を利己的な孤独のうちに閉じ込め、現実世界から切り離し、完全な主観性のなかに留まらせると言っている。

こうした非難に対して、ボーヴォワールは、人間の悲惨さ、利己主義、主観性を露わにする宗教、思想、文学、俚諺を繰り出しては、なぜ「実存主義」だけが非難されるのだろうかと問うている。

> 彼らが実存主義に向ける第一の非難は、首尾一貫した、組織化された体系であり、全体が取り入れられることを要求する哲学的態度であるということだ。あまりにも明確に規定された世界観を引き受けることで、彼らは、あまりにも重い責任を抱え込むのではないかと恐れているのだろう。
>
> というのも、人々はなによりも責任をひどく恐れ、危険を冒すのを好まず、自分の自由を巻き添えにするのではと心配するあまりに、自由を捨てるほうがましだと思う。それこそまさに、彼らの、この自由を最重要の位置におく学説に対する嫌悪感のもっとも根源的な理由なのだ。もし、実存主義に向けられた批判を考慮するならば、だれの目にも明らかな矛盾によって驚かされざるをえない。実存主義を主観主義と非難する人々は、モンテーニュ、ラ・ロシェフコー、モーパッサンを無常の喜びとしている、まさにその人である。彼らは、純然たる内在の心理学の確固たる支持者であり、そこでは、個人の投企と感情はすべて彼自身に戻っているように思われる。実存主義者は、それとは反対に、人間は超越であると主張している。人間の生は、世界へのアンガージュマン、「他者」に向かう運動、未来に向かう現在の乗り越えである（ES38-9）。

続いて、ボーヴォワールは「内在の哲学」と「超越の哲学」を対比して、次のように述べている。

> 内在の哲学では、わたしの行動の到達点は与えられている。…超越の哲学では、主体はもっぱら出発点として存在し、わたしはその存在を覆い隠すことはできず、わたしのすべての行為の源はわたしの主観性にあるということを正視しないわけにはいかない。実は、ひとが実存主義をその主観性ゆえに非難すると

き、非難しているのは、主観性と自由を同一視していることに対してである（ES40-1）。

もちろん、実存主義は「超越の哲学」であり、ここでも、「内在」と「超越」は行動の次元で使われている。「内在」と「超越」は、『第二の性』におけるキーワードであるが、『ピリウスとシネアス』で萌芽が見られ、『実存主義と民衆の知恵』においてすでに獲得されていることが確認できる。

4.『両義性のモラルのために（1947）』

『両義性のモラルのために』は、『レ・タン・モデルヌ』の一九四六年一一月号および一二月号、一九四七年一月号および二月号に掲載され、一九四七年にガリマール社から一冊の本として出版された[11]。この論評も実存主義の擁護のために書かれたものであり、ボーヴォアール自身も「当時、人々は実存主義をニヒリズムの、ミゼラビリズムの、軽薄な、卑猥な、絶望感に満ちた、卑劣な哲学と呼んでいたので、とにかく弁護しなければならなかった（PC I 98）」と述べている[12]。ここでも、ボーヴォワールの実存主義擁護の記述から、彼女が実存主義をどのように考えていたかを探ることにする。

実存主義は、はじめからひとつの両義性の哲学として規定された。キルケゴールがヘーゲルに反対したのは、両義性の還元不可能な性格を主張することによってである。そして今日、『存在と無』でサルトルが人間を根本的に規定しているのも両義性によってである。その存在があらぬということであるこの存在。世界への現前としてでなければ実現されないこの主観性。拘束されたこの自由。他人に（pour autrui）直接与えられるこの対自の出現（PMA15/14）。

『両義性のモラルのために』において、ボーヴォワールの実存主義に「両義性」という新たな意味が付け加えられたが、それは実存主義の源流への回帰でもあった。ボーヴォワールは生と死、孤独と世界との関係、自由と隷属、それぞれの人間の無意味さと重要さを根本的両義性としているが、これらは人間の条件でもある。こうした条件を明るみに出すことで、実存主義はミゼラビリズム、絶望感に満ちていると批判されたが、こうした条件を引き受けつつ生きることを、ボーヴォワールは実存と考えたのである。その際、ボーヴォワールがもっとも重視するのは自由である。

こうした「自由を肯定する」モラルは独我論ではない。個人は自らの、世界や他の個人に対する関係によってしか規定されないし、自己を超越することでしか実存しないし、個人の自由は他人の自由を介してしか実現できないからだ（PMA218/193）。

5．『実存主義とは何か（1947）』

『実存主義とは何か』は、四ヶ月に及ぶアメリカ旅行から帰国した一九四七年の初夏に、アメリカの週刊誌『フランス―アメリック』のために書かれた[13]。アメリカ旅行の間に、再三、「実存主義について手短に説明してください」と言われて、ボーヴォワールは一つの論説記事でも実存主義について説明するのには不十分と言いながらも、自分の実存主義についての考えを簡潔にまとめたのがこの作品である。そこにおけるボーヴォワールの主張を以下に要約する。

実存主義は一つの哲学であり、哲学に対するその貢献や、その妥当性について論じることは専門家にしかできないが、専門家ではない人々が実存主義に関心を持つには理由があるはずだ。その理由とは、実存主義はもっとも厳格な理論的基盤に基づくが、当時の世界で生じていた諸問題に対する実践的な、生き生きとした態度でもあったということである。

当時のフランスの知識人の賛同を得ていたのは、キリスト教と実存主義とマルクス主義であった。これらはすべて同じニーズに応えていた。そのニーズとは、フランスおよびヨーロッパ全体で、個人は苦悩しつつ、ひっくり返ってしまった世界の中で自分の居場所を見出そうとしていたということである。

キリスト教は内面性を重視し、マルクス主義は世界の客観的現実との関係を重視している。実存主義は内部と外部、主観と客観の対立を乗り越える。実存主義は、すべての意味とすべての意見（colors）の源泉および存在理由としての個人の価値を前提とするが、個人は世界への関与を通してのみ現実を得ると主張する。人間の仕事は、世界に意味を与えながら、世界を形作ることである。

6．『第二の性（1949）』

『第二の性』の序文において、ボーヴォワールは女性論を展開するにあたって「採用する観点は実存主義のモラルのそれである（DS I 31/33）」と言い、それに続いて、次のように述べている[14]。

すべての主体は投企を介して超越として自己を具体的に立てる。主体はその自由を、自らの、他の自由に向かう絶えざる乗り越えによってでなければ実現しない。無限に開かれた未来に向かって自己を広げていく以外に、現在の実存は正当化されない。超越が内在へと後退するたびに、実存は《即自》へ、自由は事実性へと堕落する。この転落は、もし主体によって同意されているならば、倫理的な誤りであり、もし主体に科されているならば、欲求不満と抑圧の形態を取るが、どちらの場合も、絶対的な悪である（DS I 31/33）。

また、ボーヴォワールは『第二の性』の「I事実と神話、第一部宿命、第三章史的唯物論の見解」で次のように述べている。

女を探求していくうえで、私たちは生物学、精神分析、史的唯物論のもたらした功績を否定するわけではない。ただ私たちは、身体も、性生活も、技術も、人間が自分の実存の全体的な展望のなかで把握するかぎりにおいて、人間にとって具体的な意味をおびるのだと考える（DS I 104/107）。

7. 結論

『実存主義とはなにか』において、ボーヴォワール自身も言っているように、実存主義はもっとも厳格な理論的基盤に基づくと同時に、当時の世界で生じていた諸問題に対する実践的な、生き生きとした態度でもあった。

私は、このボーヴォワールの分類に従って、実存主義を理論としての実存主義と実践としての実存主義に、言い換えると、「現象学的実存主義」と「実存主義のモラル」に分けると、問題が整理されるのではないかと考えている。戦後に実存主義に対してなされた総攻撃は「現象学的実存主義」と「実存主義のモラル」を混同したために起こったのではないだろうか。

第六節『第二の性』で挙げた二つの引用文のうち、前者は「実存主義のモラル」に、後者は「現象学的実存主義」に関わるが、『第二の性』を書いていた時点で、ボーヴォワールはこれら二つを分けていたのだろうか。この疑問は、今後『第二の性』を読む際の新たな視点となるだろう。

また、これら二つを繋ぐものは何かという問いが生じるであろう。それは、サルトルにおいても、ボーヴォワールにおいても自由であろう。しかし、前述のように、ボーヴォワールは自由の二つの側面を区別している。一方は、すべての人に等しく全面的に与えられている自由であり、他方は、一人ひとりの状況に応じて異なる自由である。前者はサルトルの「意識の現象学」から見えてくる自由であり、それに対して、後者は「体験の現象学」から見えてくる自由であろう。ボーヴォワールは前者を認めつつも、後者の立場に立つことで、『第二の性』を書くことができたのだ。

したがって、実存主義のモラルはすべての人に体験のレベルでの自由を保証するようなモラルになるだろう。ボーヴォワールは『ピリウスとシネアス』で、「わたしたちの自由は、一つのアーチを形作る複数の石のように、互いに支え合ってあっている」と言っている。そして、この支え合いの根底にあるのは相互承認である。

実は、『第二の性』も相互承認への呼びかけをもって終わっている。

女を解放することは、女が男との間で保っている関係のうちに

女を閉じ込めることをこばむことであり、この関係を否定することではない。たとえ、女が自分のために存在しているにしても、やはり男にとっても存在しているのだ。主体として相互に承認しながらも、それぞれは他方にとってはひとりの他者でありつづける。男女の関係の相互性は、人間が二つの切り離されたカテゴリーに分けられていることから生じる、欲望、所有、愛、夢、冒険といった奇跡を消し去りはしないだろう（DS II 576/662）[15]。

文献略号：

FA : La force de l'âge

PC : Pyrrhus et Cinéas

EH : L'existentialisme est un humanisme

ES : L'existentialisme et la sagesse des nations

FC : La force des choses

PMA : Pour une morale de l'ambiguïté

DSI : Le deuxième sexe I

DSII : Le deuxième sexe II

注

（1） Alain Renaut: Sartre, le dernier philosophe, Editions Grasset & Fasquelle, 1993.『サルトル、最後の哲学者』、水野浩二訳、法政大学出版局、1995, p.204.

（2） Edward Fullbrook: She come to stay and Being and nothingness, pp. 42-64. In: The philosophy of Simone de Beauvoir critical essays edited by Margaret A. Simons, Indiana University press, 2006.

（3） Simone de Beauvoir: La force de l'âge, Paris, Gallimard, 1960/2002. 本論では二〇〇二年版を使用した。

（4） Simone de Beauvoir: Pyrrhus et Cinéas, Paris, Gallimard, 1944/2003. 本論では一九四四年版と二〇〇三年版を使用した。

（5） Debra Bergoffen: Pyrrhus and Cineas, Introduction, p.80. In: Simone de Beauvoir Philosophical writings edited by Margaret A. Simons with Marybeth Timmerman and Mary Beth Mader. University of Illinois Press, 2004.

（6） Jean-Paul Satre: L'être et le néant, Paris, Gallimard, 1943/1976.

（7） 拙論：シモーヌ・ド・ボーヴォワールの承認論、『哲学世界』（早稲田大学大学院文学研究科哲学専攻）第26号、2005.

（8） Jean-Paul Sartre: L'existentialisme est un humanisme, Les édition Nagel, 1946.

（9） Simone de Beauvoir: La force des choses I, Paris, Gallimard, 1963/1998. 本論では一九九八年版を使用した。引用箇所は一九九八年版の p.60. 日本では『ある戦後』というタイトルで出版された。

（10） Simone de Beauvoir: L'existentialisme et la sagesse des nations, Les Temps Modernes 1, no.3, 385-404.『実存主義と民衆の知恵』は、一九四八年に、『倫理的理想主義と政治的現実主義』、『文学と形而上学』、『目には目を』とともに、一冊の本にまとめられた。本論では、一九四八年に Nagel 社から出版された版を使用した。

（11） Simone de Beauvoir: Pour une morale de l'ambiguïté, Paris, Gallimard, 1947/2003.

（12） Simone de Beauvoir: La force des choses I, Paris, Gallimard, 1963/1998. 本論では一九九八年版を使用した。

(13) What is existentialism? (1947). In: Simone de Beauvoir Philosophical writings edited by Margaret A. Simons with Marybeth Timmerman and Mary Beth Mader, University of Illinois Press, 2004.

(14) Simone de Beauvoir: Le deuxième sexe I, Paris, Gallimard, 1949/2005.

(15) Simone de Beauvoir: Le deuxième sexe II, Paris, Gallimard, 1949/2002.